

基層言語、傍層言語、上層言語の概念 と基層理論の適用条件

三島庸平

京都外国語大学 (非常勤講師)

yohei0516@hotmail.co.jp

発表の目的

ロマンス言語学の観点から以下の提案を行う

1. 基層言語、傍層言語、上層言語の概念

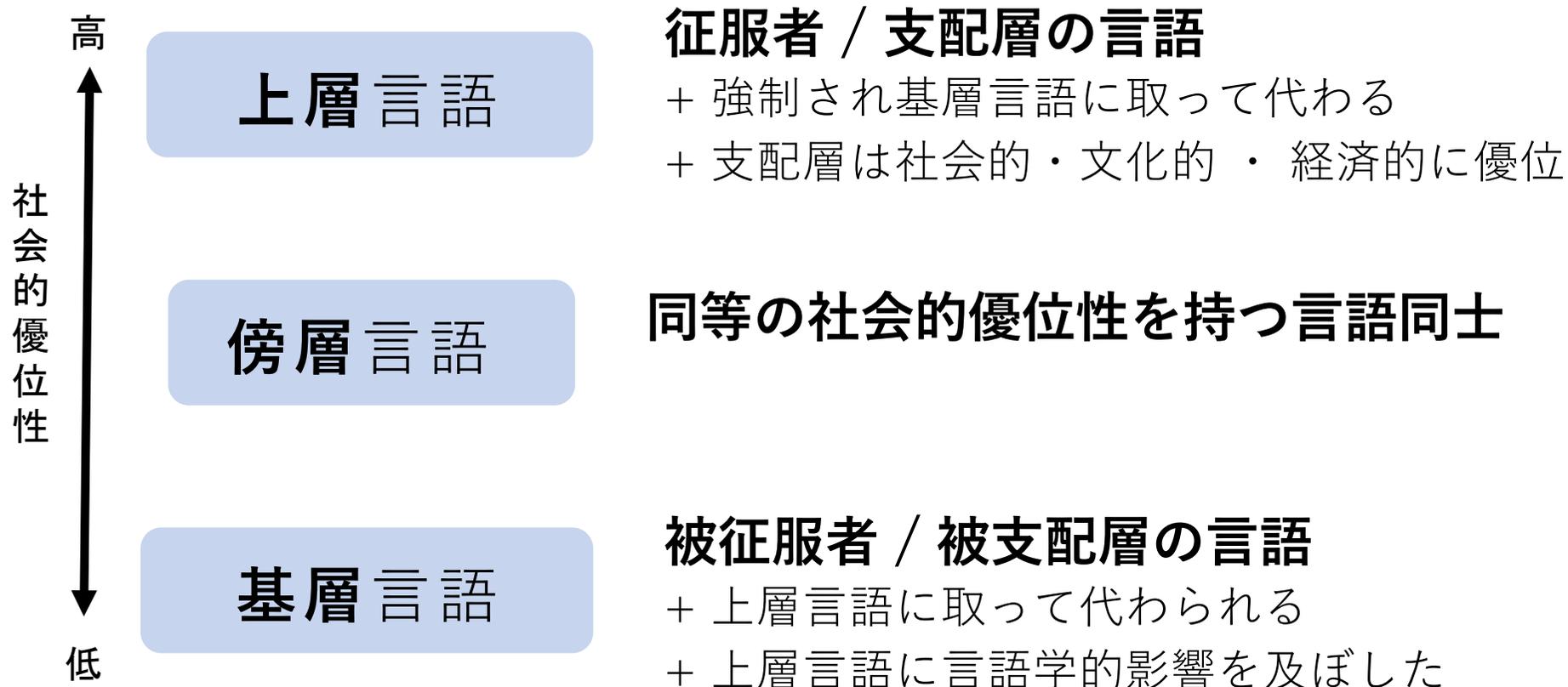
- ある言語を上記3つに分類する際、
一社会における言語の社会的優位性を重視することを提案

2. 基層理論を適用する際の条件

- 問題とされる言語変化が特定の基層言語地域外に生じている場合、
そのロマンス語も分析対象とすることを提案

1. 基層言語、傍層言語、上層言語の概念

先行研究における定義



Alonso (1954); Blasco Ferrer (2010); Dubois *et al.* (2002 [1994]); Jungemann (1955 [1952]); Matthews (2007 [1994]); 中野ほか, 2015; Lázaro Carreter (1971 [1953])

考察 言語を分類する上で重視する点が異なる

社会グループの社会的優位性

上層言語

征服者 / 支配層の言語

基層言語

被征服者 / 被支配層の言語

言語の社会的優位性

傍層言語

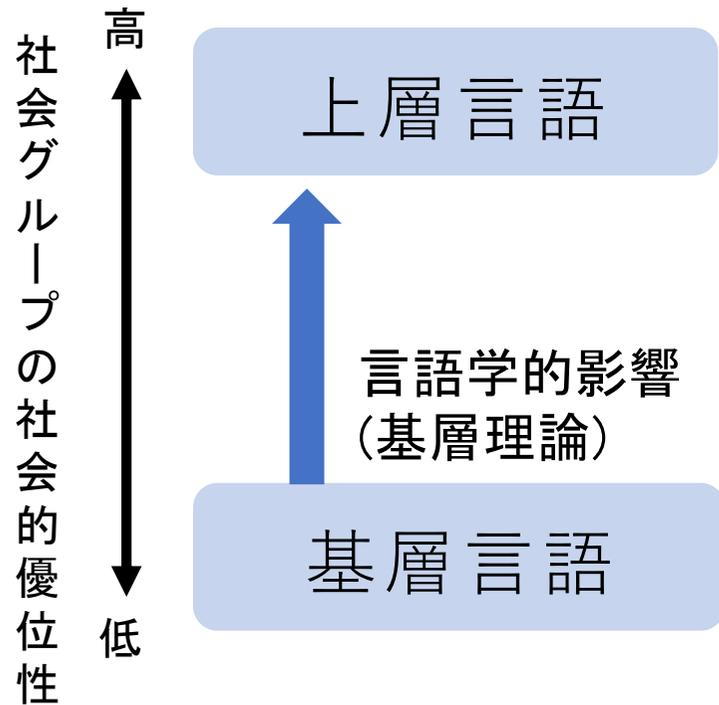
同等の社会的優位性を持つ
言語同士

問題点

社会グループと言語の社会的優位性が必ずしも一致しない

言語の分類手順

上層言語と基層言語



ステップ①

征服者
ローマ人



ステップ②

言語
ラテン語
(学習され残存)

被征服者
先住民

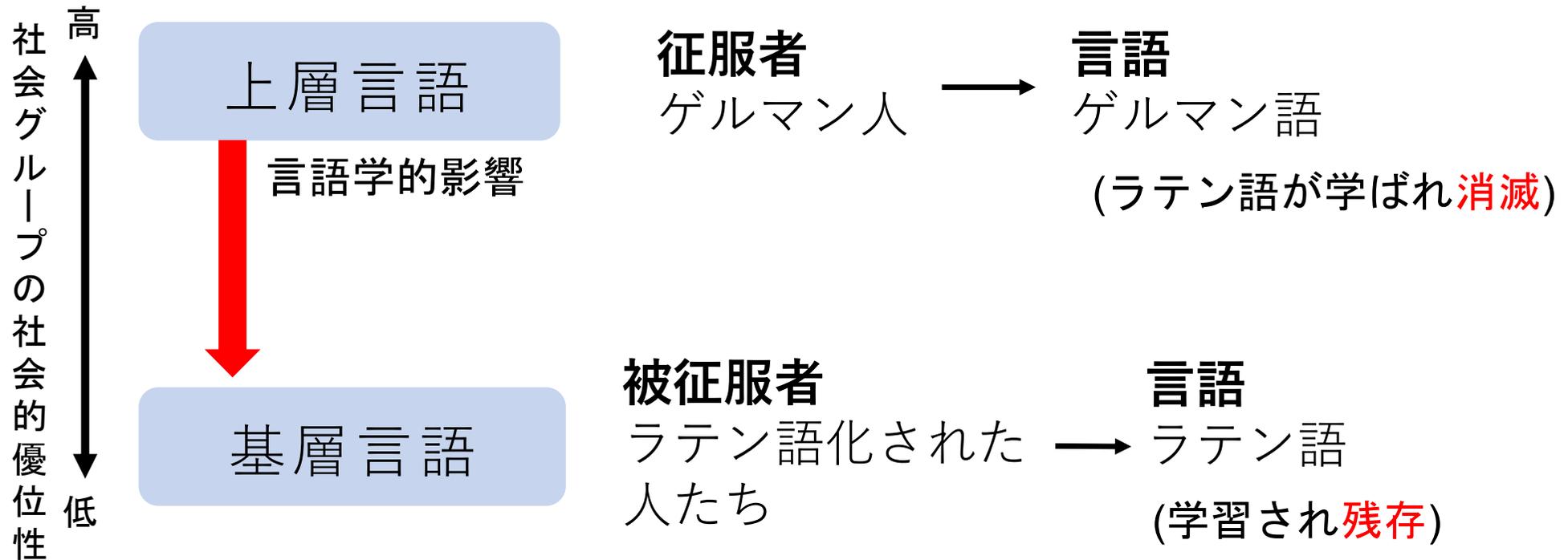


言語
先住民言語
(使用されず消滅)

分類する際、多くの事例がこの枠組みに収まる

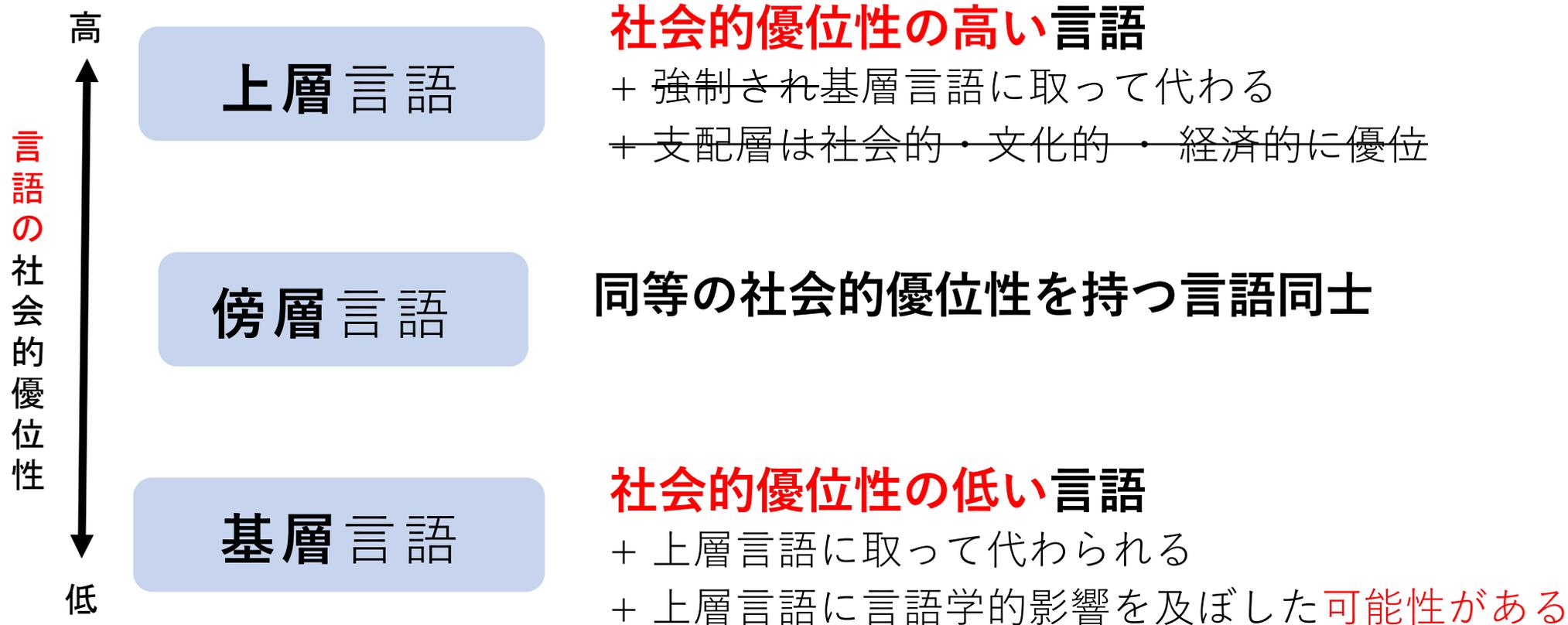
イタリア北部のゲルマン民族の事例(5世紀末～)

Lázaro Carreter (1971 [1953])

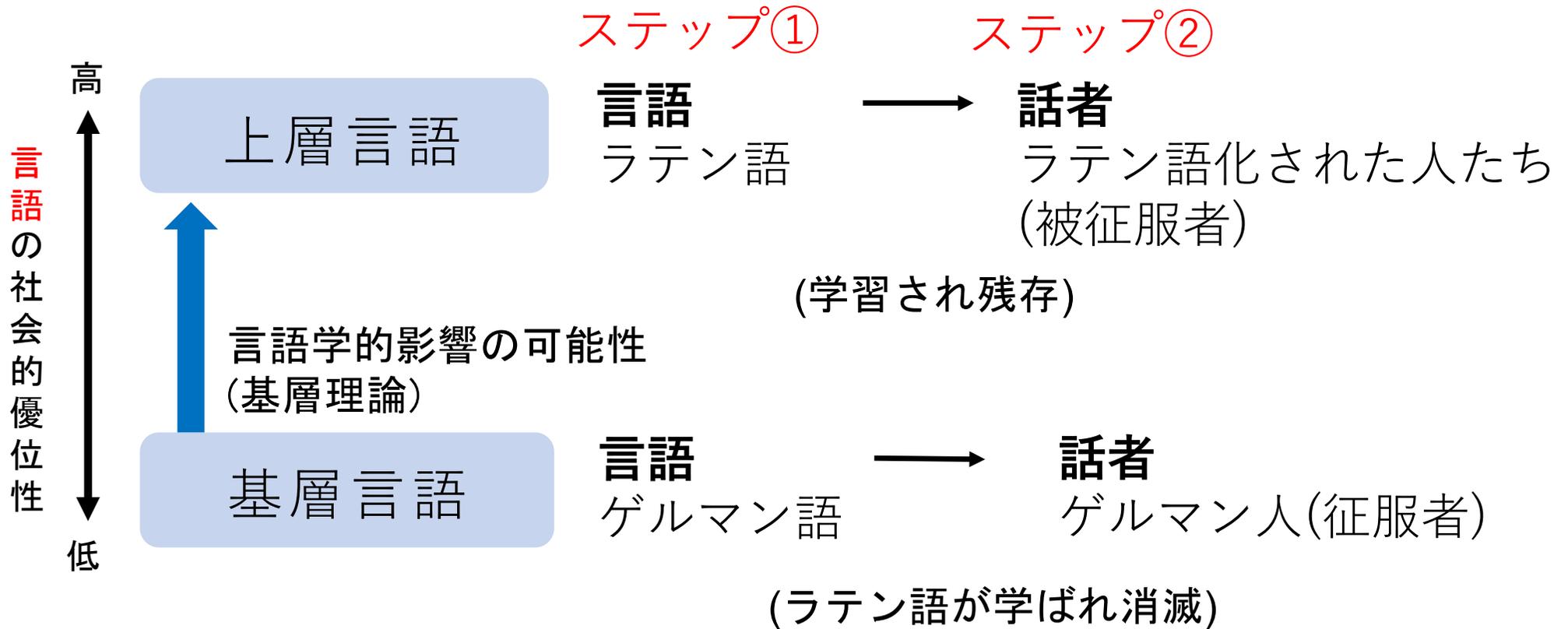


- 従来の枠組みでは例外といえる事例
- **問題** 社会グループと言語の社会的優位性が常に一致しない

提案 共通に言語の社会的優位性を重視



再考 イタリア北部のゲルマン民族の事例



一般的な枠組みに収めることが可能となる

2. 基層理論の適用条件

基層理論について

1. 言語変化理論としての評価

近年、(歴史)社会言語学の観点から言語接触の影響が再評価されている

➤ 分野例) ロマンズ語、クレオール語

- ロマンズ語では主にローマ化時代に論じられる
- 一般言語学による説明と対立

(cf. Blasco Ferrer, 2010;
Hickey, 2010; Siegel, 2011;
Trudgill, 2004; Tuten, 2003; etc.)

2. 基層理論の適用条件の主な提唱者

- Ascoli (1881)
- Jungemann (1955 [1952])
- Craddock (1969)

適応条件に対する関心は薄い

基層理論の適応条件

Jungemann (1955 [1952]: 418)

1. 問題の言語現象を引き起こしうる言語構造を基層言語が持つ
2. その言語現象が内的要因のみによって説明できない
3. その言語現象を持つ言語の使用地域では長期間の二重言語使用がある
4. その二重言語使用の間、文化的中心地から孤立している

Craddock (1969: 28)

- a) Areal Configuration
 - 問題の言語変化は基層言語の歴史的 sử 用地域に限る(普及による拡大は別)
 - そのほかの地域の同一(または類似)変化は重要ではない
- b) Structural Parallelism (≡ 上記 1.)
- c) Temporal admissibility (≡ 上記 3.)

提案 そのほかの地域の同一変化は重要である

音声変化それ自体は内的要因で説明可能 (Sala, 1998: 36)



複数のロマンス語が同じ変化を持つ場合
通時共時の観点から相違点と類似点を明確化



地理的な距離は重要ではない

その相違点が基層言語の影響に起因し得るかを検討

起因しない場合や相違点がない場合
仮説としての基層理論の擁護は困難

例) F > /h/ の変化

スペイン語を中心に研究されてきたが、



ロマンス言語学からのアプローチ

従来のアプローチ

1. 主にイベリア半島の近隣言語との比較 (通時共時)

変化の**稀有**を強調し、
基層理論を**支持**

2. 離れた地域で同じ変化を持つロマンス語に対して

➤ 同じ変化が存在することへの言及

➤ 変化の音韻的広がりの簡略的な比較 (共時のみ)

変化の**一般性**を強調し、
基層理論を**否定**

問題 ロマンス語間の相違点および類似点が不明瞭

Mishima (2020)では以下2点を分析

- 現行の話し言葉
- 8~15世紀までの公証文書 (計1871文書)

F > /h/ の関係性 (Mishima, 2020)

	原因	音声変化過程	推定年代
スペイン語	カンタブリア / ケルトイベリア語 基層 + 音声発展	$[\varphi] > [h] > [\emptyset]$	<u>8世紀以前 (ローマ化の時代に回帰しない)</u>
ガスコーニュ語	アキタニア語およびバスク語 基層 + 音声発展あるいは音声代替	$[f] > [\varphi] > [h]$ $[f] / [\varphi] > [h]$	<u>418-511以前</u> (Chambon & Greub, 2002)
イタリア語諸方言	音声発展	$[f] > [\varphi] > [h]$	中世末あるいは近代以降
サルデーニャ語諸方言	(音声発展)?	$(([f] >) [\varphi] > [h])?$?
ルーマニア語諸方言	音声発展 (硬口蓋化)	$[f] > [fç], [fç] > [xʲ] (/ [hʲ])$	15世紀以前 (Gouvert, 2016)

スペイン語とガスコーニュ語では変化が早期に生じている
→ 基層言語の影響の可能性

3. まとめ

まとめ

1. 基層言語、傍層言語、上層言語の概念

問題点 社会グループと言語の社会的優位性が必ずしも一致しない

提案 言語を上記3つに分類する際、言語の社会的優位性を重視する

利点 ①例外事例を一般的枠組みに収める ②概念の一貫性が高まる
③この分類法の汎用性が高まる

2. 基層理論の適用条件

問題点 特定の基層言語地域外にある同一の言語変化が重要視されていない

提案 同じ変化を持つロマンス語の相違点および類似点を明確化する

利点 相違点、特に推定年代の違いは基層理論の根拠の一つになり得る
(→基層理論の検証を可能とする)

最終考察と今後の課題

「言語の社会的優位性」を基準とすることで
基層・傍層・上層言語の分類法を様々な時代で行えるのではないか



例) 移民の2言語使用、カタルーニャのような2言語使用地域

ただし2言語使用の一社会で傍層言語の分類は困難ではないか

→言語の社会的優位性に違いがある場合が多い

仮説としての基層理論の汎用性が高まる

基層言語と上層言語に分類することで基層理論の枠組みに入れることができる

→ 基層言語の影響を「**一つの可能性**」として検討できるのではないか

カタルーニャ地方のスペイン語の軟口蓋/l/は

カタルーニャ語との「歴史的言語接触」で説明される (Jodl, 2015)

→基層的影響?、傍層的影響?、他の形での影響?と不明瞭

これらは理論的推察であるため実際の検証が今後の課題

4.

参考文献

- ALONSO, A. (1954): *Estudios Lingüísticos: temas españoles*, Madrid: Gredos.
- ASCOLI, G. I. (1881): *Lettere glottologiche: prima lettera*, Torino: Loescher.
- BLASCO FERRER, E. (2010): *Paleosardo: le radici linguistiche della Sardegna neolitica*, Berlin: Walter de Gruyter.
- CHAMBON, J.-P. & Y. GREUBI (2002): «Note sur l'âge du (proto) gascon», *RLR*, 263-64, pp. 473-495.
- CRADDOCK, J. R. (1969): *Latin legacy versus substratum residue: the unstressed "derivational" suffixes in the romance vernaculars of the western Mediterranean*, California: University of California Press.
- DUBOIS, J. et al. (2002 [1994]): *Dictionnaire de linguistique*, Paris: Larousse.
- GOUVERT, X. (2016): «Du protoitalique au prototoman: deux problèmes de reconstruction phonologique», en E. Buchi & W. Schewickard (eds.), *Dictionnaire Étymologique Roman (DÉRom) 2: Pratique lexicographique et réflexions théoriques*, Berlin / New York: De Gruyter, pp. 27-52.
- HICKEY, R. (ed.) (2010): *The Handbook of Language Contact*, MA / Oxford: Wiley-Blackwell.
- JODL, F. (2015): «Estigma y auge de prestigio: El cambio f > h en castellano y gascón visto desde la sociolingüística histórica y la lingüística variacional», *RFR*, 32, pp. 21-40.
- JUNGEMANN, F. H. (1955 [1952]): *La teoría del sustrato y los dialectos hispano-romances y gascones*, Madrid: Gredos.
- LÁZARO CARRETER, F. (1971 [1953]): *Diccionario de términos filológicos*, 3.^a ed., Madrid: Gredos.

- MATTHEWS, P. H. (2007 [1994]): *The Concise Oxford Dictionary of Linguistics*, 2.^a ed., Oxford: Oxford University Press, en línea: <<https://www.oxfordreference.com/view/10.1093/acref/9780199202720.001.0001/acref-9780199202720>> (consulta: 01/12/2019).
- MISHIMA, Y. (2020): *El cambio de la F etimológica en oralidad y escrituralidad desde las perspectivas de la lingüística románica*, tesis doctoral, Universitat de València, 947 p.
- 中野弘三ほか監修 (2015): 『最新英語学・言語学用語辞典』, 東京: 開拓社.
- SALA, M. (1998): «Lenguas en contacto en el ámbito hispánico», en P. Odber de Baubeta (ed.), *Actas del XII Congreso de la Asociación Internacional de Hispanistas (Birmingham, 21-26 de agosto de 1995)*, Birmingham: University of Birmingham, pp. 27-40.
- SIEGEL, J. (2011): «Substrate reinforcement and the retention of Pan-Pacific Pidgin features in modern contact varieties», en C. Lefebvre, *Creoles, their Suvstrates, and Language Typology*, Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 531-556.
- TRUDGILL, P. (2004): *New-Dialect Formation. The Inevitability of Colonial Englishes*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- TUTEN, D. N. (2003): *Koineization in medieval Spanish*, Berlin / New York: De Gruyter.